

精神分析の〈教育〉における三項関係

片岡 一竹

ジャック・ラカンの生涯に亘る活動を振り返ってみた際、そこで常に発見せられる言葉の一つが〈教育〉であることは、衆目の一致するところであろう。それは一つには精神分析家の「養成」(formation)であり、またその不可欠な契機をなす「教育分析」(analyse didactique)であり、さらにその活動の最後期においてラカンは、精神分析の伝達(transmission)の問いに対峙していた。実際、ラカンは常に教育者の立場に置かれていた。それは精神分析家の共同体、すなわち彼の《学派》(École)においてのみならず、セミナーや、あるいは著作の中でもそうだった。彼が自らのセミナーや執筆活動を〈教育活動〉(enseignement)と称していた事実は周知の通りであるが、そこには、かくのごとく確かな正当性が存在していたのである。

だが〈教育〉と単純に呼ばれるこの概念が極めて複雑な諸問題を孕んでいることに、我々は敏感でなければならない。一体、精神分析における〈教育〉とは何の謂いであろうか。精神分析がジークムント・フロイトという特異な個人の独自の実践ではなく、一つの〈運動〉として、ある組織によって運営されるにあたって、何某かの意味での〈教育〉が要せられるのは不可避ではあったが、しかしそこには端緒からある不調和、断絶、疎外が生じていたのである。だが本稿では〈教育〉を巡るフロイト以来の精神分析運動の歴史に足を踏み込むことは差し控え¹、ラカンにのみ焦点を絞ることとする。何となれば、フロイト後の分析家の中でもとりわけラカンは、後述する様々な理論的、政治的諸事情のために、精神分析における〈教育〉の定義を根底的に問い直さざるを得ず、そしてそこから固有の意味での精神分析を基礎づけざるを得なかったからである。

ラカンが自らの〈教育〉について語った代表的なテキストとしては、第一に「《学派》の精神分析家に関する 1967 年 10 月 9 日の提言」(AE: 243-260²。以下、

「提言」と略称)を挙げることができる。だがこの論攷を読もうとする者は、ただちに他のテキストに差し向けられざるを得ない。何となれば論攷の冒頭においてラカンは、本論を読む前に「1956年における精神分析の状況と精神分析家の養成」(E: 459-468. 以下「養成」)を精読するよう促しているからである(AE: 243)。ゆえにこれらは単体で読まれることはできないのであって、両者の比較的検討によってその同一性と差異が別抉され、ラカンの〈教育〉の基底たるものが、ならびにその様々な試行錯誤が、闡明されなければならないのである。

我々の意見では、まさにその鍵鑰となるのが〈三項関係〉を巡る議論であると思われる。この図式は両者共に見出されるものであるが、しかしそれを巡る議論には大きな隔たりがある。この隔たりが如何なるものであり、また何故に生じたものかが、何より初めに検覈されねばならない。

1. 第三項としての《他者》

「養成」について、それが執筆された時期を鑑みるならば、そこでのラカンの主眼が精神分析への象徴界 (le symbolique) の導入にあったということは、容易に首肯されうだろう。本論においてラカンはまず主張するのは、フロイトの、殊にその前期の仕事のなかに象徴界の理論を見て取ることの重要性である。

1897年から1914年にかけてのフロイトの努力はすべて、無意識の諸機制メカニズムにおける想像界 [l'imaginaire] と現実界 [le réel] を区別することであった。奇妙にもこのことによって精神分析家たちは、二つの段階において、まずは想像界をもうひとつの現実界にすることに、そして〔次いで〕我々の時代では、想像界に現実界の規範を見出すことに導かれた。

なるほど想像界は錯覚ではないし、理念のための素材を与えてくれる。だがフロイトが彼の追従者を富ましめる宝を捜し出すことを可能にしたもの、それは想像的機能が従属している象徴的決定であり、この象徴的決定は、言葉の忘却の機制メカニズムに関することであれ、フェティシズムの構造に関することであれ、フロイトにおいて常に強烈に想起されるのである。

そして我々は以下のごとく言うことができる。すなわち、神経症の分析

が常にオイディプスの結び目〔*nœud*〕に連れ戻されねばならないことを執拗に主張することによってフロイトは、他でもなく、想像界を象徴的連関において確かなものにするを、まさに意図していたのである。何故なら象徴秩序は少なくとも三項を要求〔*exige*〕しており、このことは分析家をして、そこに定在しているため、発話者を包含してはいない二者の間に現前する《他者》を忘れないよう命ずるからだ (E: 463-464. 傍点引用者)。

フロイトの真の遺産は「象徴的決定」の発見にあるのであって、想像界は象徴的決定に従属しており、象徴的連関において初めて保証されるはずのものである。なるほど彼がまず着手したのは想像界と現実界の区別³であり、このことは分析家をして、想像的なものうちにもある現実性を見出すことを可能にした。実際、ラカンの時代には、想像的なものが現実的なものの規範であると見做されていたのだ。しかしながら、確かに想像界にも一定の価値はあるにせよ、未だ象徴的なものの重要性が十分に明らかではないのである。

かくのごとく主張することでラカンが抗わんとしている「精神分析の状況」とは、精神分析における想像的なものの重視であり、また自律的自我の理念の跋扈である。国際精神分析協会 (International Psychoanalytic Association. 以下 I.P.A.) が自我心理学の影響の下で分析の目的として掲げていた分析家への (健康な) 自我の同一化を、ラカンは厳しく論難する。周知のとおりラカンにとって自我は自律的なものなどではなく、誤認 (*méconnaissance*)⁴ の機能においてその固有性を明らかにするものであり (E: 487)、つまりそれは自らを真に規定する無意識的な象徴秩序を見誤り、否認するようなものなのである。

したがって健康な自我への同一化は想像的同一化に他ならず、それは真の精神分析的次元を構成する象徴界を閑却して、^ズ双数^ニ決^ス闘^ス的^ナな^レ関係^ニに^テ貶^メて^シま^ウ (E: 464) ことを意味する。そこには二者による「想像的な再生産の途」(E: 475) しか残っていないだろう。何となれば、そこには第三項としての象徴秩序が欠けているからである。

我々にとって先の引用の中で最も注目すべきはこのことである。象徴的なものは、分析家をして (分析家と患者という) 二者の間に現前している第三項たる《他者》に目を向けさせるものなのである。そしてこの第三項は「発話者」

(celui qui parle) として規定されている。そう、分析の場において発話する（＝パロールを発する）のは、分析家でも患者でもなく、その第三者、象徴秩序としての《他者》なのだ。

2. ^{シニフィオン}意味の〈了解〉からシニフィアの〈説明〉へ

かかる議論の理解のためには、そもそも第三項としての象徴秩序が如何なるものであるかが十分に展開せられなければならない。

精神分析家は、この〔象徴的なものの〕明証性において、人間は誕生以前から死後まで象徴的連鎖に捕えられており、この象徴的連鎖は彼のイストワール個人史が刺繍される前に彼の家系を創設したものであるということを確認しなければならない。分析家は以下のような考えに慣れなければならない。すなわち人間は自らの存在そのものにおいてこそ——滑稽な言い方をすれば、彼の全人格においてこそ——ひとつの全体として実際理解されるのだが、それはシニフィアの戯れにおける一つの駒のように理解されるのであり、また彼が結局その規則を掴み取る〔surprendre〕という限りで規則が彼に伝達される前からそうなのだ。この優先の秩序はひとつの論理的な、つまり常に現働的な秩序として理解されなければならない (E: 468)。

いくつかの議論を補いながら解釈しよう。人間は誕生以前から死後に至るまで象徴界の連鎖のうちに捕らえられている。ここでは特に、象徴的なものが彼の「家系」⁵として捉えられている。人は生まれる以前から、例えば「誰々の息子」や「何々家の跡取り」といったシニフィア的身分を、自らは気づかないうちに充てがわれており、そうしたシニフィアの戯れの中の一つの駒のようなものとして、彼の存在は理解されなければならないのである。

ただしここで注記すべきは、それはある人物を彼の一族の物語によって理解するようなことを推奨するものでは決してないということである。何となれば、彼が自らの家系という象徴的連鎖において受け取っているものは、何某かの意味としてではなく、ひとつのシニフィアとして捉えられなければならないか

らである。

その証拠に、続く議論では、分析家が患者の発言を「了解〔comprendre〕すること」を避けるように求められている（E: 471）。曰く、「こんな吐き気のする範疇〔のこと〕は、ヤスパース氏とその一党に任せておけ」（*ibid.*）。かかる批判は同年⁶のセミナー『精神病』においても述べられている（S3: 216/邦訳下巻 58 頁）。周知のとおりヤスパースは、科学的観察による普遍的、原理的な〈説明〉（Erklären）と現象学的記述による直観的、明証的な〈了解〉（Verstehen）との対置に基づき、精神病患者の体験の記述は外在的〈説明〉ではなく内在的〈了解〉に基づかなければならないと論じ、爾来精神病はその「了解不可能性」によって規定されることとなった（ヤスペルス [1953: 40–42]）。しかし、ラカン^{パロール}はそれを批判し、あくまで精神病の科学的構造を〈説明〉することを求める。ただしここでの「科学」とは、ヤスパースにおけるがごとく自然科学の謂いではなく、あくまでシニフィアン^{シニフィオン}の科学である（S3: 216/邦訳下巻 58 頁）。反対に、〈了解〉とは意味^{シニフィオン}の次元にしか属しておらず、ただ混乱のみをもたらすものである。我々の目的はラカンの精神病論の検討ではないため、ここではごく単純に、〈了解〉とはシニフィアンの象徴的構造を捨象した^{シニフィオン}意味による理解であること、したがって上で想像的なものとして糾弾されているものと同次元に属することを確認するに止めておこう。

したがって、先ほどの議論と関連させて言えば、家族の物語というものは、それが意味^{シニフィオン}に基づく了解である限りで、まさに避けなければならないのである。その代わり分析家は、「その音すなわち音素、単語、成句、金言〔sentence〕を聞き取り、句読も区切りも切断も句点も対句法も聞き逃さないような耳」（*ibid.*）を鋭くしなければならない。「というのも、そこにこそ翻訳〔version〕の一語一語が準備されており、それなくしては分析的直観に支えも対象もなくなってしまうからだ」（*ibid.*）。分析家は、単に患者の発言の意味^{シニフィオン}を理解するのではなく、その語りそのもの、すなわちそこにおいて如何なる音素が登場しているか、如何に単語が用いられているか、如何なる成句や金言といった修辞的要素が含まれているか、また発言のどこに区切りが入っているか……といったことを、文字通り逐語的に解釈しなければならない。いわば言語を意味としてではなくシニフィアンとして聴取することが、そこでは求められていたので

ある（片岡 [2017: 97]）。

そう、それゆえにこそ、シニフィアンとしての言語は、発話者として規定されねばならなかったのだ。患者の発話を彼の発話として捉える限り、そこでは言語の^エ効果＝^フ結果たる^シ意味の〈了解〉しか行うことができない。そうではなく、シニフィアンの^{シニフィカシオン}象徴秩序そのものの語りを傾聴せねばならないのである。

かくのごとく、「養成」のテキストの議論の軸を成しているのは第三項としての《他者》であり、それは象徴秩序として規定されていた。無論「養成」のテキストから読み取れることはそれに尽きるものではない。何より本論のもう一つの主題である「状況」が、未だ十分に明示せられていない。だが我々の主眼があくまで「提言」との比較的読解であることを考慮して、これ以上の縷説は避け、暦を10年ほど先に進めることとしよう。

3. 純粹精神分析と応用精神分析

「養成」と「提言」の二者が共通して目的としているのは、いずれも当時「正統」なものとしていた I. P. A. 式の〈教育〉に対抗し、それとは異なった仕方でも〈教育〉の問題系を練り上げることであると言える。そして、そこで〈第三項〉が重要な役割を果たしているということも共通している。しかしながら、そのために両者が採用する理論的枠組みは大きく異なっている。

その大きな要因の一つは、1956年と1967年の間で、ラカンが置かれている政治的状況が一変したことである。本稿においてラカンを取り巻く細々とした政治的状況について詳述するつもりはないが⁷、それでも最低限の事実に言及せずには済ませられまい。要約すれば以下のごとくである。1963年、ラカンが主導的立場をとっていた「フランス精神分析協会」（*Société française de psychanalyse*. 以下 S. F. P.）に、かねてからの本願であった I. P. A. への加入が認められる。ただし、その条件として課せられたのはラカン（およびラカン派の何人か）の教育分析家資格を剥奪することだった。S. F. P. はこの指令を受諾し、かくしてラカンは S. F. P. から、そして I. P. A. からの〈破門〉を経験する。それを受けて、ラカンは翌64年に「一人きりで」（AE: 229）自らの《学派》、パリ・フロイト学派（*Ecole freudienne de Paris*）を設立することとなった。

《学派》を立ち上げたラカンがまず強いられたのは、精神分析における自らの立場を、I. P. A.からは截然と区別されたものとして表明することだった。その際に中心的な論点となったのが、まさに自らが剥奪されたばかりの「教育分析家」を巡る諸問題であったことは容易に忖度されうる。そしてここにこそ、「養成」と「提言」の大きな差異の一つがある。すなわち前者において語られている分析家の教育は、未だ分析家たちへの箴言といった性格が強く、上尾 [2017: 228] を援用すれば、「当時はまだ、分析家が知っておくべきことが問題とされて」いたに過ぎなかった。これに対し後者において問題となったのは、ラカンが言う意味での「精神分析」を成立させるべき、実際の制度的枠組であった。いわば、「養成」においてはラカンの精神分析の理念が問題とされていたに過ぎなかったのに対し、「提言」においては理念の実現が問題とされねばならなかったのである⁸。かくのごとく「提言」の読解にあたっては、まずもってそれが提案している制度の理解が要せられるのであり、その観念の抽象によってこれを読解することはできないことを我々は踏まえなければならない。

その前提となるのが《学派》の「設立紀要」(Acte de fondation. 「設立行為」とも訳すことができる)(AE: 229-242)において提示された、「純粋精神分析」(psychanalyse pure)と「応用精神分析」(psychanalyse appliquée)の区別である。前者は「固有の意味での精神分析の実践と領域」(AE: 230)であるが、それは「教育分析に他ならない」(ibid. 強調引用者)。これに対して「治療的なものと医学臨床的なもの」(AE: 231)は精神分析の応用に過ぎないとされた。すなわちここでラカンは、〈精神分析とは医学的治療に関わるものであって、精神分析家の養成に関わる教育分析は副次的なものである〉という一般的な観念に真っ向から抗っている。かかる主張は「提言」においても姿を現す。引用しよう。

この〔精神分析という〕経験は、治療法から切り離すことが必要不可欠であり、治療法とは、精神分析の厳格性を緩和させることによって分析を歪めるにとどまらないものである。私が指摘するに、治療法について唯一可能な定義は、それが原初状態の復元であるということ以外にない。こうした定義はまさに精神分析のなかでは措定されえないものである (AE: 246)。

畢竟原初的な状態の復元でしかない「治療法」なるものによって、精神分析を定義することはできない。真の精神分析は、治療と区別された純粹精神分析、すなわち教育分析に他ならないのである。ラカンはまた以下のように述べる。「蛇足的に教育的と言われる分析の終結、それは精神分析主体が精神分析家へ実際に移行（passage）することである」（AE: 251）。純粹精神分析が教育分析である以上、分析の終結とは分析主体（analysant）——これはそれまで「被分析者」（analysée）と呼ばれていた分析患者にラカンが与えた新たな名である——の分析家への〈移行〉に他ならず、この分析が「教育分析」と「教育」の語を付けて呼ばれるのは、蛇足に過ぎないのである。そしてこの〈移行〉を、すなわち分析の終結を保証する制度的装置こそ「パス」（passe）の制度であった。

4. 保証と認可——「パス」が孕む逆説

《学派》には二種類の会員資格があった。すなわち、「《学派》分析家」（Analyste de l'École）と「《学派》会員分析家」（Analyste Membre de l'École）である。後者が「自らの力量を証明した分析家として単に《学派》が承認したという事実によってなる」（AE: 243）ものであるのに対し、前者は「彼が分析のために到達した諸々の正鵠〔points vifs〕における核心的諸問題を証言できる者」（AE: 244）である。そしてパスとは、この《学派》分析家の保証のための制度である。それは I.P.A.における教育分析家の認定に相当するものと言える（立木 [2016: 590]）。

しかしながらここで我々は、「保証」（garantie）という言葉について、立ち止まって考えてみなければならない。そもそも精神分析家の大原則としてラカンが挙げているのは、「精神分析家は己れ自身によってのみ認可される」（AE: 243）というものである。この原則は精神分析家の認可（autorisation）を行うような如何なる組織もあり得ないということを主張するものである。ラカンがこの「提言」を、I.P.A.へ抗いながら記していることを思い出そう。ラカンが何よりも避けようとしたのは、なにがしかの教説ドグマに基づいて、それに合致しているか否かを判断基準とし、教育分析家の資格を授与したり剥奪したりするような制度で

ある。それはまさにラカンを追放した I.P.A. の制度に他ならない。ここでラカンが何より重視していたのは、それぞれの分析家が何某かの《他者》の認可に拠らずして、自ら単独的に精神分析家として立つことである。このことは「提言」の次の一説に顕れている。

実際、《学派》の含蓄に富んだ存在理由は忘れられている。それは精神分析を原初的＝独創的な経験として構成することであり、分析の有限性を表す点までそれを押し進め、そして周知のとおり分析に根源的である時間効果、すなわち分析の事後性 [l'après-coup] を可能にすることである (AE: 246)。

先述の通り、治療的な分析（応用精神分析）において目指されるのは「原初的な状態の復元」であった。対して真の精神分析（純粋精神分析）において問題となるのは「精神分析を原初的＝独創的な経験として構成すること」なのである⁹。かかる観念は後期ラカンにおける特異性 (singularité) の重視を思わせる。晩年のラカンが分析主体の症状の根にある特異的なものを剔抉し、特異的症状への同一化を促していたというのは、近年盛んに言及される主題である¹⁰。こうした姿勢が明確化されるようになったのは 70 年代においてであろうが、しかし 64 年のセミナーの末尾に彼が「絶対的差異」(différence absolu) ——我々は後にまたこの語に戻ってくるだろう——について語ったとき (S11: 248/邦訳 371 頁)、すでにそうした姿勢は打ち出されていたものと考えられる。

だが、精神分析の目的が単に「絶対的差異を目指す」ことや「精神分析を原初的＝独創的な経験として構成すること」に尽きるのであれば、わざわざ《学派》分析家の保証制度など創設せずとも、単に各々に勝手にそれを名乗らせてしまえばよかつただろう。何せ、精神分析が各々に特異なものでしかありえない以上、《学派》などというものが成立すべき正当性はないのだから。

だがそれでもラカンは、この一文の後に、以下のごとく続けている。「以上のことは、分析家が養成を受けたと《学派》が保証することを排除するものではない」(AE: 243)。すなわち、《学派》は分析家の認可を行うことはできないが、分析家の保証は行うことができるのである。認可 (autorisation) と保証 (garantie) の差異に注意しなければならない。精神分析家とは自らによってしか認可され

えない。しかし、にもかかわらず、彼はパスによって保証されることはできるのである。かかる保証の可能性にこそパスの存在意義があるのであり、またその背景には、精神分析における三項関係の必要性が存している。

5. パスにおける三項関係

パスはその定義上、認可されえないものを保証するという逆説を孕んでいた。そのためにそれは分析家と分析主体の二人組^{カップル}においてしか産出されない特異的なものに対し、常に1を足すような制度であらねばならなかった。つまり、パスとは単に《学派》分析家の志願者（これは「パスン」(passant)と呼ばれる)がすでに《学派》分析家の座についている審査者からその資格を授与されるようなものではないのである。パスンは自らの分析体験の審査委員への証言を、自分と同程度分析を進めているもう一人の人物、つまり「パサー」(passeur)に委ねなければならない(AE: 255)。パスンは審査に臨むために、まずパサーという第三者に自らの分析体験を伝達しなければならないのである。

なるほど審査委員も——そこにパスンの分析家が含まれていないならば——こうした第三者の座を担えるかもしれない。だがパサーを介さずにパスンが直接証言に臨めば、それは畢竟フロイトが「集団心理学と自我分析」で批判したような自我理想への同一化に陥ってしまうのであって、そのような諸個人で構成された《学派》など、まさしく「同じ一つの対象を自我理想の代わりに置き、その結果、自我が互いに同一化してしまった、相当数の個人から成る」(フロイト [2006: 188]。傍点を削除)ものに他ならないだろう。それはまさに I. P. A. が陥った袋小路に他ならない。なるほど「提言」において「集団心理学」の論文への言及は為されていないが、このことはすでに「養成」において批判されていたところのものであり (E: 474-475)、「提言」においてもその姿勢は変化を見せていないものと考えられる¹¹。

だがパサーの存在意義が明らかになったところで、審査委員会が何を基準にパスンの〈移行〉を保証するのかという疑問が残る。しかしこの疑問は、そもそも精神分析の目的が「絶対的差異」であったことを想起してみるならば容易に解決される。絶対的差異とは、まさしく「分析家の欲望 (désir d'analyste)」

が目指すものに他ならなかった (S11: 248/邦訳 371 頁)。そうであれば審査の基準となるものは、パサンがついに分析家の欲望を身につけたか否かであると言うことができる。

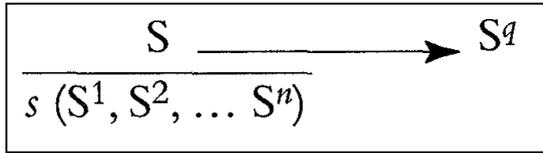
実際「提言」はこの分析家の欲望についての議論に大きく紙幅を割いている。我々も以下でこの議論を検討し、そのことによって、パスの契機においてのみならず、個々の精神分析の臨床の場においても、三項関係が不可欠のものとして提示せられているさまを見出すであろう。そしてまた、そこにおける三項関係が、「養成」におけるそれと隔たっていることも。

6. 想定された知の主体という第三項

ここまで我々が問題としてきたパスとは〈移行〉の保証であり、したがってそれは分析の終結に関するものであった。しかしながらラカン曰く、「我々の、保証のための機関が機能すべき接点は明らかである。つまりそれは、チェスにおけるように、精神分析の始点と終点である」(AE: 246)。したがって我々は精神分析の開始についても検討しなければならないだろう。

精神分析の始点、それはラカンによって明言されている。すなわち、転移の成立である (AE: 247)。そして転移のラカンの定義に基づいて、それは想定された知の主体 (*Sujet supposé Savoir*) の成立と換言できる。転移は往々にして〈過去の人間関係における抑圧された無意識的欲望が治療者との関係の中に回帰したもの〉として、すなわち反復の一種として扱われるが、『精神分析の四基本概念』において、ラカンは転移と反復を峻別し、前者を想定された知の主体によって定義した¹²。その姿勢は「提言」でも変化しておらず、転移を反復の観点から捉えることは、転移の効果を見逃させると主張されている (AE: 248)。

しかしここで目を引くのは、ラカンが想定された知の主体に与えている定義である。彼は「我々が教えるのは、〔主体は〕もうひとつのシニフィアンに対して主体を表象する〔represente〕するシニフィアンによって想定されるということである」(*ibid.*) というよく知られた文言を述べつつ、以下の図を掲げる¹³。



(出典：AE：248)

左上の「S」は転移のシニフィアンであり、それが任意のシニフィアン (Sq) を含意 (impliquer) することで、想定された知を内包 (impliquer) する主体 (s) が導かれる。そしてこの知とは「無意識におけるシニフィアンであって、未だ隠れている参照項 [réfèrent] の代わりになる意味」(ibid.) であると言われる。ここで重要なのは、ラカンは想定された知の主体を、^{シニフィアン}分析家と分析主体に加わる精神分析の第三の構成要素であると主張しているという事実である。

精神分析は、精神分析家と精神分析主体として身を置く二人のパートナーの間で取り決められた状況の維持のうちに成立するものであるとしても、三項から成る構成要因——それは精神分析によって始まるディスクールにおいて導入されたシニフィアンである——という対価を払ってしか発展できないであろう。この構成要因は、想定された知の主体と呼ばれ、技巧によってではなく僥倖によって形成されたもので、精神分析主体からは分離したものとしてある (AE: 248-249)。

想定された知の主体とは分析家のことではない。それは分析主体と分析家の二者関係に付け加わるものである。それが分析の開始の条件であれば、精神分析は三者関係によってしか成立しないということになる。だがまずここで我々が注目すべきは、第三項として措定されている主体が持つものが、まさしく(想定された)〈知〉であるということである。

60年代のラカンにとって、「知」という語は特別な意味を持つ。それはこの語が真理 (vérité) に対立させられる限りにおいてである。例えば1966年の論文「科学と真理」(E: 855-877)を参照しよう。このテキストの議論は「知と真理に分裂したものとしての主体」(E: 856)から出発している。知と真理の分裂、

それは《他者》(の《他者》)の、あるいはメタ言語の不在の直接的帰結である。以下の一節は決定的である。

メタ言語（論理実証主義全体を位置づけるために作られた所説）はない、如何なる言語も真についての真[le vrai sur le vrai]を語ることはできない、というのも真理は、真理が語るという事実根拠を置いており、自らを根拠づけるための他の手段は有していないからである（E: 867-868）。

真理は知の限界の外にある。それゆえ真理について語ること（parler de la vérité）は不可能であり、ただ真理が語る（la vérité parle）という出来事が生じるのみである（上尾 [2017: 124]）。このようにラカンにとって、真理と知は明らかに対立したものであり、またその限りにおいて、真理こそが精神分析が目指すものであるとされていた。そうであれば、精神分析家が行うべきもこの真理を剔抉することであり、あらゆる知を断固として拒絶することであると言えるだろうか。否、かかる主張は、想定された知の主体という第三項を捨象してしまって、その重要性を看過するものでしかないだろう。事態はそれほど単純ではない。

7. 非 - 知と分析家の欲望

「提言」の続く部分を検討しよう。精神分析が分析主体と分析家、そして想定された知の主体の三項関係において成立するならば、次に問題となるのはこの主体と分析家の関係である。あくまで見逃してはならないのは、この想定された知の主体と分析家は本来何の関係もないということ、したがって「分析家は想定された知について何も知らない」（AE: 249）ということである。だからこそ分析家は、新たな症例に向き合う際はそれまでの経験をすべて忘れなければならない。しかし、これだけではまだ充分ではないのである。

ラカンは続ける。「このことは精神分析家が、自分は何も知らないということを知って自足することを認めるものでは全くない。というのも、問題になっているのは分析家が知るべきことだからである」（*ibid.*）。分析家は想定された知

について何も知らない、しかしそれでも、彼は己れの無知を知るだけで満足してはならない。彼には知るべきことがある。それは非 - 知 (non-savoir) である。ここにおいて問題となっているのは単なる無知 (ignorance) ではなく非 - 知であり、ジャック＝アラン・ミレールの言葉を借りれば、「固有の仕方方法化された非 - 知」(Miller [2010: 171]) なのである。

一体真理とは、それについては語り得ず、ただそれが語ることしかできないものである。したがって分析家は直接真理を扱うことができず、その代わりに非 - 知を扱わなければならない。定義上あらゆる知を拒絶する真理とは異なって、非 - 知は、それが固有の仕方方法化されれば、ある種の分節化せられた秩序をもたらしてくれるものなのである。

ではその固有の方法とは何か。ラカン曰く、それは「論理の名に値するすべての論理がそれにしたがって作用するような「保留された」[en reserve] 関係そのものから描くことのできるもの」(AE: 249) であり、さらに「それは非常に厳密な文字の連鎖として分節化されているので、その一つたりとも取り損なわない限りで、知の枠としての非 - 知 [non-su]¹⁴ が秩序化される」(ibid. 強調引用者)。そう、ここで分析家が知るべき非 - 知とは、厳密な文字の連鎖として分節化されたものなのである。そしてそれはすぐに「テキスト的知」(savoir textuel) と称されることとなるだろう (AE: 250)。

ここには一見、「養成」に見られたようなシニフィアン——それは 50 年代においては文字とほぼ同義だった¹⁵——の論理と同様の議論が見出せるように思われる。つまり象徴界のシニフィアンそのものの聴取である。だが、両者の主張は同じものではない。何となれば、ここでの文字の連鎖は、あくまで「知の枠としての非 - 知」を秩序化するためのものであるからである。「養成」において、《他者》とはほぼ象徴秩序の謂いだった。それに対して「提言」における《他者》には、いわば、斜線が引かれている。すなわち、ここで問題となっているのは、その裂け目から真理の出来事が出来るような、いわば象徴界の極限としての非 - 知を闡明することなのである。

そしてこの非 - 知こそ、まさに分析家の欲望が位置付けられる場所に他ならない (AE: 249)。分析家の欲望の規定を、今や我々は得ることができる。それはテキスト的知を、すなわち知の枠としての非 - 知の裂け目を通して、真理に

自らを語らせようとする欲望に他ならない。

上述の通り、分析の成立の保証たるパスにおいて賭けられているものは、来るべき分析家が分析家の欲望を得たか否かであった。そして今や我々は分析家の欲望の規定を得た。そうであるならば、次に問われるべきは、かかる分析家の欲望が如何に生じるのかという問題である。それはすなわち、分析の終結の、〈移行〉の条件の問いである。

8. 〈移行〉と想定された知

ここで我々は再度分析の終結について議論しなければならない。しかしその鍵鑰はすでに我々の掌中にある。我々は分析の開始が転移の成立であると述べた。ならば分析の終結は反対に、転移の解消によって規定されるはずである。

転移において想定される知が、「未だ潜在的な参照項の代わりとなるもの」であったことを思い出そう。したがってそれは参照項を覆うものであり、転移によって成立する欲望は「現実界に向けられた窓」(AE: 254)を構成するものとしてのファンタスム (fantasme) に基づいているのである。

ファンタスムとは何かについて議論すれば、それだけで一つの仕事になってしまう。ここでは拙著の議論(片岡 [2017: 166-180])に基づいて、それを〈言語の世界への参入によって失われた《もの》(das Ding)の残滓としての対象 *a* (objet *a*)と一定の仕方で結びつくことで構成される、欲望の枠組み)と定義することで満足しておこう。ファンタスムにおいて対象 *a* を得ることにより、主体は現実界との一定の紐帯を確保し、欲望を駆動させることができる。だが精神分析においてはこのファンタスムを横断 (traversée) しなければならない。何となれば、主体はファンタスムの中で、ヴェールによって遮蔽され、その原因としての真理から隔てられているからだ。ファンタスムは畢竟、主体が言語の世界に参入した際に蒙った分裂を隠蔽してしまうものに他ならない。だが同時に、ファンタスムを成立させていた対象 *a* が分析において剔抉されたとき、それはこの分裂を主体にとって明らかにするだろう。

それゆえ転移の最後において、主体はこのファンタスムから失墜させられる。

このように要約された構造は、転移関係の終わりに生じる〔se passe〕ことについての想定を可能にしてくれる。つまり、精神分析主体の作業において支えとなっていた欲望が解消され、終に、もはやその^{オプシオン}選択権を行使したいと望まないときに生じるものである。それはつまり、彼の分裂を決定するものとして、彼を自らのファンタスムから失墜させ、主体として解任する残余である（AE: 252）。

残余（reste）とは、対象 *a* の別称である。転移関係の終わりにおいて、主体の分析的作業を支えていた欲望は解消され、主体は自らのファンタスムから失墜する。そしてそこにおいて対象 *a* が姿を現すことによって、主体の分裂が、彼の脱存在（désêtre）が明らかになるだろう。

この〔ファンタスムから得ていた確信が崩壊する際に明らかになる〕脱存在において、想定された知の主体の非本質的なものが露呈し、そこから、来るべき精神分析家は欲望の本質である *ἀγαλμα*〔アガルマ〕に身を捧げ、己れと己れの名前が任意のシニフィアンに還元されることで埋め合わせをする覚悟をするのである。

何故なら、彼は、自らのファンタスムの原因を知らなかった存在を、ようやく彼があのだ想定された知になったまさにその瞬間^{コメント}に投げ捨てたのだから（AE: 254）。

転移のファンタスムの崩壊は、「想定された知の主体の非本質的なもの」を露呈させる。しかし、注意しよう、そこにおいてもなお、想定された知が消失したわけではないのである。自らのファンタスムの原因を知った分析主体（それはすでに「来るべき分析家」となっている）は、欲望の本質としてのアガルマ¹⁶に身を捧げる。そしてその代わりに彼は「己れと己れの名前が任意のシニフィアンに還元されること」を得るが、そこで彼は自らが想定された知の主体になるのを見るのである。

もちろんそれは彼が何らかの知を得ることを意味するものではなく——想定された知が存在の内実を満たすものではないことは、すでに明らかになっ

ているのだから。むしろそれはある位置への移行であり、そしてその契機においてこそ、分析家の欲望が生じるのである。「精神分析家の欲望、それは彼の言表行為であって、この言表行為は分析家がxの位置にやって来ることによってしか作用しない」(AE: 251)。この「xの位置」は去勢におけるファルスの欠如 $(-φ)$ にも関連付けられるが、「(a)」とも言われている (*ibid.*)。そうであれば、ファンタスムを横断した来るべき分析家が欲望の本質に身を捧げることは、彼が転移のファンタスムを支えていた「a」の位置から言表行為を行おうと覚悟することであり、それこそが〈移行〉の正体であると言い得る。

ここで我々が気付かずにおけないのは、〈移行〉においても第三項が不可欠な役割を果たしているということである。分析家への〈移行〉は分析家の言表行為の位置へのそれではなければならない。そしてそこで生じるのが、分析を成立させていた第三項が内包していた想定された知への生成なのだ。ここでは想定された知が第三項となっているのが見て取れる。分析家への〈移行〉とは、実際、この第三項への生成なのである。

9. 〈二人組自閉症〉に抗して

我々の歩みを簡潔に振り返っておこう。「養成」における第三項とは象徴界の謂いであり、そこにおいては分析家と患者の二者関係において患者の発言を意味^{シニフィカシオン}の次元で〈了解〉するのではなく、第三項としての象徴界そのものの語りを聴取することが目指されていた。他方「提言」における第三項は想定された知の主体であるが、分析家はテキスト的知として分節化された非-知をもってこの主体と関わり、この知の裂け目から出来すべき真理の出来事を剔決することが求められていた。そしてそれ自体三項から成るパスが保証する分析家への〈移行〉とは、転移のファンタスムの失墜によって、転移の欲望の本質に身を捧げる覚悟を決めた分析主体が分析家の位置から言表するようになることであるが、その記述は想定された知への生成という第三項を用いて為されていた。

かくのごとく両方のテキストは共に、精神分析は——殊に教育のための純粹精神分析は——三項関係において捉えられなければ決して成立しないことを、それぞれ異なった観点から証明することを目指していたと結論することができ

る。そしてかかる姿勢は、さらに 10 年を隔てた 24 番目のセミナー *L'insu que sait de l'une bevue s'aïlle à mourre* (1976–1977 年) においても見出される。それは精神分析の「伝達」に関するものである。

皆さんに、少なくとも精神分析家の方々にお許しを請いたいと思いますが、要するに、精神分析は二人組自閉症〔*autisme à deux*〕と呼べるのかどうかを知ることについての問いを取り上げることが、それでも必要なのでしょうか。それでも、この自閉症を打ち破ることを可能にするあるものがあります。それはまさに、ララングが共通の事柄であるということであり、まさにその場所に私がいる、換言すれば、ここにいらっしゃる皆さんに私のことを理解させることが可能であるということです。それこそが保証となるものであって——このために私は精神分析の伝達を今日の論点にしたのですが——それは、精神分析は私が今しがた二人組自閉症と呼んだものがために還元不可能な形でびっこを引くことになりはしないという保証です (S24: 19/04/1977)。

この一節においてラカンが、精神分析を「二人組自閉症」にしてしまうことにあくまで抗い、そしてその抗いにこそ精神分析の伝達の保証を見出している。それは本稿で繰り返し強調せられた、分析が常に三項関係においてしか成立しえないという主張の延長線上に位置するものであろう。遡及的な言及が許されるならば、ラカンが分析における教育の問題に取り組む際に常に抗拒していたのが、分析を「二人組自閉症」に貶めることであると言うことができる。

だがここに述べられている「ララングは共通の事柄である」という主張について、本稿の理論的道具によって検討することはできない。けだし、我々が参照した時期のラカンにおいては、まだこの概念が誕生していなかったためである。しかし、本稿において剔抉せられた多様な理論的枠組の根底にある一貫した姿勢を導きの糸として、我々は新たな問題と対峙することができるであろう。ただしその機会については他日を待たねばならない。

註

1. フロイトがその精神分析運動において蒙った問題の数々については、数々の伝記的著作に加えて、比嘉 [2012] の、特に第1章と第2章を参照されたい。
2. ラカンの著作からの引用は、*Écrits, Autres écrits, Séminaire* からの引用はそれぞれ E, AE, S の略号で示す。Séminaire については略号の後ろに巻数をアラビア数字で示し、ジャック＝アラン・ミレール校訂の本が存在する場合はそのページ数を、存在しない場合は参照した講義の日付を記す。邦訳があるものはそのページ数も付すが、訳文は原則として原文から訳出した拙訳を用いた。
また我々が参照する「提言」のテキストは実際に1967年に口頭発表されたオリジナルのバージョン（これは『他のエクリ』に付録として収録されている。AE: 575-591）ではなく、1968年に改稿され『シリセット』誌に掲載されたもの（『他のエクリ』本文に収録されている版）である。というのも、後者のテキストにおいてこそ、改稿を経てラカンの議論がより完全なものとなっていると想定されるからである。本来ならば両者のテキストの差異についても検討しなければならないが、それは別の機会に譲る。
3. ただしここで用いられている「現実界」の語は、江湖に知られる「象徴界の欠如としての不可能な現実界」という意味では用いられておらず、むしろ一般的な意味での「現実性」（réalité）の意味に近いと考えられる（事実ブルース・フィンクによる英訳では“reality”と訳されている（Lacan [2007: 388]））。
4. « me connaître »（私を識る）と « méconnaître »（誤認する）を掛けている。
5. 牧瀬 [2015] は主体がその家系における「シニフィアンの系譜学」において位置付けられるさまについて明快に描き出している。
6. ただし我々が参照しているテキストは、1956年9-10月に発表されたテキストを加筆修正し、翌57年10-11月に『哲学研究』誌に発表されたものであり、さらに『エクリ』に収録される際にいくつかの註などが加筆されているので、厳密には同年ではない。
7. パスの創案に関する政治的経緯と、その状況における理論的意義については、何より立木 [2016] を参照のこと。この論文は我々の議論に大きな影響を与えている。
8. ただし、以下において闡明せられるように、そもそも両者が提示している〈理念〉それ自体が差異を孕んでいることに注意せねばならない。
9. そしてその際に重要なが事後性の論理であるが、残念ながらこの問題を扱うことは本稿の域を超えている。
10. 河野 [2014: 237-245]、松本 [2015: 380] などを参照のこと。
11. 立木 [2015: 28] も「提言」の中にかかる批判を見出している。
12. 「想定された知の主体があれば、すなわち転移があります」（S11: 210/邦訳 313頁）。
13. 以下の議論について、特に「参照項」の理解に関して、上尾 [2017: 229sq.] が大きな参考となった。
14. ラカンは « non-savoir » と « non-su » という二種類の語を用いているが、意味に大きな違いはないと思われるので訳語においてはこれを区別しなかった。
15. だが無論、両者は全く同じものではない。50年代ラカンにおける文字とシニフィアンの関係については、フィンク [2015: 114-119] がその微妙な関係を明快に解説している。
16. これはセミナー『転移』の根本概念であるが、残念ながら十分に検討する紙幅が

残されていない。ここでは簡単にそれを欲望の、殊に転移の欲望の本質であると捉える。

引用文献

- 上尾真道『ラカン 真理のパトス——一九六〇年代フランス思想と精神分析』、
京都：人文書院，2017年。
- 片岡一竹『疾風怒濤精神分析入門——ジャック・ラカンの生き方のススメ』、東
京：誠信書房，2017年。
- 河野一紀『ことばと知に基づいた臨床実践——ラカン派精神分析の展望』、大
阪：創元社，2014年。
- フィンク、ブルース『「エクリ」を読む——文字に添って』、上尾真道、小倉拓
也、渋谷亮訳、京都：人文書院，2015年。
- フロイト、ジークムント「集団心理学と自我分析」、藤野寛訳『フロイト全集』、
第17巻、東京：岩波書店，2006年，127–223頁。
- 立木康介「マルクスに回帰するラカン」、『思想』、第1089号、東京：岩波書店、
2015年，21–39頁。
- 立木康介「ラカンの六八年五月——精神分析の「政治の季節」」、市田良彦、王
子賢太（編）『現代思想と政治——資本主義、精神分析、哲学』、東京：平
凡社，2016年，574–609頁。
- 比嘉徹徳『フロイトの情熱——精神分析運動と芸術』、東京：以文社，2012年。
- 牧瀬英幹「精神分析における「伝承」の問題について——「不可能なもの」と
の関係を巡って」、『psychA』、第2号、東京：戸山フロイト研究会，2015
年，19–31頁。
- 松本卓也『人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』、東京：
青土社，2015年。
- ヤスペルス『精神病理學總論（上）』、内村祐之、西丸四方、島崎敏樹、岡田敬
藏訳、東京：岩波書店，1953年。
- Lacan, J., *Écrits*, Paris : Éditions du Seuil, 1966.
——— *Le séminaire Livre XI (1964), Les quatre concepts fondamentaux de la*

- psychanalyse*, Paris : Éditions du Seuil, 1973. [小出浩之, 鈴木國文, 新宮一成, 小川豊昭訳『精神分析の四基本概念』, 東京 : 岩波書店, 2000年]
- *Le séminaire Livre XXIV (1976–1977), L'insu que sait de l'une bevue s'aile à mourre*, inédit.
- *Le séminaire Livre III (1955–1956), Les Psychoses*, Paris : Éditions du Seuil, 1981. [小出浩之, 鈴木國文, 川津芳照, 笠原嘉訳『精神病』上下巻, 東京 : 岩波書店, 1987年]
- *Autres écrits*, Paris : Éditions du Seuil, 2001.
- *Écrits : the first complete edition in English*, trans. by Fink, B., New York : W. W. Norton, 2007.
- Miller, J. -A., « Logiques du non-savoir en psychanalyse », *La Cause freudienne*, n° 75, Paris : Navarin, 2010, pp. 169–184.